

【原 著】

町づくりを考える実践事例の検討
—総合的な学習の時間を通じた中学生の意識変化に着目して—

鎌田 明美 梶井 一暁

Examining a Practical Case of Learning for Community Development
-Focusing on the Changes in Awareness of Junior High School Students During Integrated Studies-

KAMADA Akemi, KAJII Kazuaki

2026

岡山大学教育推進機構 教師教育開発センター紀要 第16号 別冊

Reprinted from Bulletin of Center for Teacher Education and Development,
Institute for Promotion of Education and Campus Life, Okayama University, Vol.16, March 2026

町づくりを考える実践事例の検討

—総合的な学習の時間を通じた中学生の意識変化に着目して—

鎌田 明美※1

梶井 一暁※2

本研究は、中学校総合的な学習の時間における町づくりにおいて、他者との協働や相互作用を通じて町づくりを構想し、実践の結果生じた学習者の変化からその効果を明らかにすることを目的としている。また、対話的な学びで重視される他者との相互作用を、中学校の実践に落とし込み、そのあり方についても検討する。本実践のねらいは、多様な視点から町の将来の姿やあり方を人との関わりについて読み解き、持続可能な町のあり方について自分事に引き寄せて考えることで、町に対する意識の変化を促すことにある。実践の結果、学習者の町に対する見方や考え方の意識変化が引き起こされ、町づくりの持つ地域課題について自分事に引き寄せて思考することができた。

キーワード：総合的な学習の時間、中学生、町づくり、対話的な学び

※1 阿南市立阿南第一中学校

※2 岡山大学学術研究院教育学域

I 問題の所在

中学校学習指導要領解説総合的な学習の時間編(2018)には、対話的な学習指導については、他者との協働や外界との相互作用を通じて、自らの考えを広げ深めるような学びの充実を図ることが示されている。

対話的な学習指導について、合田(2016)は、指導者が子供たちの状況を把握し、他人の知識や頭を活用して知の協働をしながら、新しい発想を生み出すのは、中学生段階が効果的であると判断するからこそ効果を上げることができると伝えている。田村(2018)は、①他者への説明による情報としての知識や技能の構造化、②他者からの多様な情報収集、③他者と共に新たな知を創造する場を生み出すとともに、課題解決に向けた行動化も期待できるとしている。したがって、対話的な学習指導による他者との協働は、新しい発想や新たな課題を生み出すことが考えられる。しかしながら、中学校の総合的な学習の時間の対話では、一部の学習者が自身の経験や知識をもとに、一面的な見方・考え方を主張して展開している場面も少なくないことが指摘されている¹⁾。それでは、対話的な学習指導を通じて、中学生の多様な見方・考え方を育むには、どのように取り組むとよいだろうか。

中学校学習指導要領解説総合的な学習の時間編（2018）では、地域課題としての町づくり、伝統文化、地域経済、防災などを取り上げている。学習者がこれらの地域課題を自己の生き方との関わりで考え、よりよい解決に向けて地域社会で行動していくことを示している。例えば、総合的な学習の時間で町づくりを地域課題として取り上げると、地域の多様な立場や年齢の人との関わりを通して、地域社会に役立っていることを実感するとともに、地域の新たな課題も見えてくると思われる。

下山田・清野（2020）は、低平地の豪雨災害に対する防災意識の伸長をねらいとしたESD教育プログラムの実践を行なっている。中学生の災害体験を起点とした探究学習の結果、防災意識の伸長や低平地における防災面からの持続可能なまちづくり（SDGs目標11）への動機づけと、地域課題改善にむけた提案を発信している。竹村ほか（2017）は、中学校の課外活動と総合的な学習の時間を接続させ、地域と文化、環境を「流域」の概念で繋ぎ、町づくりを構想している。

これらの先行研究からは、川の流域を扱うことによって地域の見方が変わる可能性が示唆されている。しかし、人と川の関係性を取り戻し、流域の持続可能性や川との関わり方について、多様な視点から自分事に引きつけて思考する学びには至っていない。

今、持続可能な地域社会を考えると、学習者が暮らしている地域社会の将来の姿について真剣に捉え、どのような町にしたいか、将来の町づくりを学習者自身が描くことを必要としているのではないかと思われる。このような問題関心により、本研究の目的を多様な他者とのやり取りを通じ、学習者の町に対する意識がいかに変化するかを検討することとする。

II 実践の方法

1 実践の概要

（1）実践のねらい

多様な視点から人との関わりについて読み解き、持続可能な町のあり方について当事者意識を持って考えることを通じて、町の姿の変化にせまる学習者の意識変化を促すことにある。

（2）対象

徳島県において人口減少が課題の町にある公立K中学校第2学年の1学級32名の学習者を対象に、2020年7月の期間に総合的な学習の時間の授業で実践を行った。実践および調査は2年教員2名が担い、町のことについて助言するアドバイザーは、学校や町教育委員会関係者など8名が担った。

（3）単元構成

本実践は単元で構成している。単元構成については、表1に示した。また、単元計画については、表2に記している。

表1 単元構成

総合的な学習の時間	
<p>【単元】町づくり構想を考えよう（6時間）</p> <p>【目標】人口減少を課題とする町の未来を考える。①～④のテーマを設定した。 ①子育てしやすい町にするには ②他町へ引越す人を減らすには ③本町で長く元気に暮らすには ④引越してくる人を増やすには (1)①～④のテーマに分かれ、調査・分析・まとめ・表現をする。 (2)課題解決のプロセスを学び、深く考える力を育成する。</p> <p>【育成するスキル】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・情報収集の手法 ・コミュニケーションスキル ・分析、まとめ、表現のスキル ・課題解決力 ・主体性 ・協働性 	
各教科等の単元名と関連が考えられる資質・能力	
数学	（知識及び技能）「資料の活用」 データ分類，グラフや表の作成
社会	（知識及び技能）「統計資料の使い方」 資料の見方，情報収集の仕方，分類整理や分析手法
国語	（思考力，判断力，表現力）「情報を整理して書こう」 情報整理のレッスン「比較・分類」 思考のレッスン「意見と根拠」
道徳	（学びに向かう力，人間性等）「社会参画，公共の精神」 公共の精神をもって，よりよい社会の実現に努める
家庭	（学びに向かう力，人間性等）「私たちの成長と家族・地域」 家庭生活と地域との関わり，幼児の生活と遊び，地域での協働を目指して，みんなが暮らしやすい社会を目指して—ユニバーサルデザイナー—

表2 単元計画

	内容
事前学習	(1)個人で町づくりに関する課題を考え，付箋紙に書く。（1時間） (2)考えた課題の重要度を様々な視点から捉え，序列化する。（1時間）
本時	町づくり中学生会議（2時間）
事後学習	(1)会議の内容について振り返りシートにまとめる。（1時間） (2)町づくり構想に向け，班で整理・分析をし，具体案を作成する。（1時間）

(4) 学習過程

次に学習過程を示す。本時「町づくり中学生会議」(2時間)における①テーマに関する考えを個人で書く。②個人の考えをグループでやり取りし、互いに意見交流する。③意見交流後、やり取りした意見を参考にして、個人の考えを書く。④③の班員の意見交流をふまえた考えをアドバイザーに伝え、助言を聞く。⑤アドバイザーの助言をふまえ、個人の考えをまとめる。

学習者には、学習過程の①③⑤で、ワークシートの記述を求めている。そこから得られた学習者の記述を分析資料としている。学習者の記述については、①個人で考えたもの、③班員との意見交流をふまえて考えたもの、⑤アドバイザーからの助言をふまえて考えたものとなる。

Ⅲ 学習者の記述の分析

1 データの収集と分析方法

ワークシートへの学習者の記述を集め、記述内容を分析する²⁾。筆者は都合3回の個人の考えの記述で計96の記述をデータとして入力した。その全てを本稿で検討するには、紙幅が足りず、学習者の意識変化を捉えるため、①～④のテーマのなかから、「①子育てしやすい町にするには」の記述を取り上げた。他のテーマの検討については、別稿を期したい。

2 記述のカテゴリー分類

(1) KJ法による分類と整理

学習者から得られた記述について、「はなればなれのものを結合して、新しい意味を創りだしてゆく方法論である」³⁾という特徴を持つ分析手法であるKJ法(川喜田, 1967⁴⁾, 1970⁵⁾)を用いて筆者と大学院の学生で分類、整理を行った。その結果、学習過程①、学習過程③、学習過程⑤が表3、表4、表5となった。分類、整理の結果については、筆者と大学院の学生が協議し、最終的な合意を得た。

表3 学習過程①の記述のカテゴリー分類

カテゴリー	件数	分類した根拠	例文
場所	11	公園や遊び場などが表現されているもの	公園を作る 遊べる場所をつくる
施設	7	病院や公共施設などが表現されているもの	病院(小児科)を増やす 保育園を増やす
店舗	5	生活や育児に関するお店などが表現されているもの	店を増やす お店を多くする
育児	5	子どもの成長や子育てなどが表現されているもの	赤ちゃん用品をそろえている店を増やす
環境	3	地域生活の環境などが表現されているもの	町を広げる
交流	3	人と人の交流などが表現されているもの	保護者が集まって交流を深める場
道路	2	道路に関する事などが表現されているもの	子どもでも安全な道路をつくる
活動	1	育児に関する活動などが表現されているもの	図書館での読み聞かせ
職員	1	公共施設で働く人などが表現されているもの	保育所や学校の先生 病院で働く人を増やす

表4 学習過程③の記述のカテゴリー分類

カテゴリー	件数	分類した根拠	例文
環境	7	地域生活の環境などが表現されているもの	子どもが成長するために必要な公共施設を増やす
施設	6	病院や公共施設などが表現されているもの	子ども関連の公共施設を増やす
育児	6	子どもの成長や子育てなどが表現されているもの	小児科や耳鼻科などの入ったいろいろな病院を一つにまとめた病院をつくる
場所	4	公園や遊び場などが表現されているもの	子どもとかが遊べるところを作ったら、子どものストレスが減ると思うから
店舗	4	生活や育児に関するお店などが表現されているもの	子育てが大変だからお店が近いと親も安心する
交流	3	人と人の交流などが表現されているもの	K町の地域の人と交流し、親しく関わられるような町にする
道路	2	道路に関する事などが表現されているもの	狭くて危ない歩行者通路を幅の広い安全な歩行者道路にする
活動	2	育児に関する活動などが表現されているもの	他県の人たちや地元の人たちがKのものを使った体験をする
職場	1	育児する親の働く場所などが表現されているもの	子どもを増やすことも大切だけど、両親や町の人が働ける場所をつくる
住居	1	家屋の利活用などが表現されているもの	古くなった家を壊す 伐採した木で家をつくる

表5 学習過程⑤の記述のカテゴリー分類

カテゴリー	件数	分類した根拠	例文
店舗	6	生活や育児に関するお店などが表現されているもの	新たに赤ちゃん用品を取り扱っている店が町に来てもらえなかったら、今ある店に取り扱ってもらう
場所	4	公園や遊び場などが表現されているもの	子どもの遊ぶ場所がなくて引っ越していく人がいるから、子どもが遊べる場所をつくる
環境	4	地域生活の環境などが表現されているもの	公園の遊具が危なかったりするの、怪我しないような遊具を増やす
育児	4	子どもの成長や子育てなどが表現されているもの	K病院をもっと進化させて産婦人科を設置して子どもを産める場所にしたらい
自然	3	自然豊かな町のことなどが表現されているもの	K町の自然を肌で感じられることがいいと知りました
商品の取り扱い	3	育児に関する商品をお店で取り扱うことなどが表現されているもの	今ある店に赤ちゃん用品を置く
施設	2	病院や公共施設などが表現されているもの	親や子どもがうれしくて、安心するような公共施設をつくる
管理	2	地域社会の管理運営などが表現されているもの	小さな公園をなくして、大きな公園にして管理しやすくする
道路	1	道路に関する事などが表現されているもの	田んぼなどに自転車専用通路を作ったり、新しくまた違う道路をつくる
宣伝	1	町の良さを広めることなどが表現されているもの	K町を知らない人にもっともっとK町の良いところを広めていったらいいと思う

(2) カテゴリー分類の根拠

カテゴリーを分類した根拠を整理して示す(表3, 表4, 表5)。分類と整理の結果, 表3では, 「場所」「施設」「店舗」「育児」「環境」「交流」「道路」「活動」「職員」の合計9カテゴリーが生成された。表4では, 「環境」「施設」「育児」「場所」「店舗」「交流」「道路」「活動」「職場」「住居」の合計10カテゴリー

ーが生成された。表 5 では、「店舗」「場所」「環境」「育児」「自然」「商品の取り扱い」「施設」「管理」「道路」「宣伝」の合計 10 カテゴリーが生成された。

(3) カテゴリーの変化

それでは、三つの表を比較し、カテゴリーの変化にしがってみたい。まずは表 3 と表 4 を比較すると、表 3 にある「環境」「施設」「育児」「場所」のカテゴリーが表 4 も多い。「店舗」のカテゴリーも表 3 と同様、多く見受けられているが、学習者の記述が育児を支援するようなものに変化してきていることが見受けられる。また、「職場」のカテゴリーが生成されている。

「店舗」というカテゴリーは、班員の「店が遠いと子育てが大変になるし、店が近かったら、もしも何かがあったときに、すぐ必要なものを買うことができるからとてもいいと思った！」という助言を肯定的に取り入れたと考えられる。現在、K 町の店舗は住居から 1 キロ圏内にある近い店舗では、十分な食料品や育児用品を購入することは難しい現状にある。しかしながら、育児に時間が費やされる親が 10 キロ以上離れた店舗に頻繁に買いに行くのは、厳しい現状であると考え、店舗が近いと便利であるという記述が見られる。

「職場」のカテゴリーが生成されたことについては、出生や育児も大切だが、同時に子育て世代の親の職場環境を整えること、子育て世代の親が働く場所がないといけないということの考えが成り立ったと思われる。班でのやり取りによって、育児に必要なものを整えるという育児環境はもちろんだが、住環境、職場環境も地域で整える必要があることに気付き、意識の広がりが見られる。

表 3 と表 4 を比較した結果、例えば、「店舗」をみても、表 3 では「店を増やす」というだけであったが、表 4 では「子育てが大変だからお店が近いと親も安心する」へと変化したことで根拠が見えてきている。個人で考えたときよりも、班でのやり取りを経た後は、班員との意見交流によって、単なる思いだけでなく、根拠をふまえた考えへと整理できるようになってきたことが窺われ、意識変化が推察される。

次に表 4 と表 5 を比較すると、表 4 にある「店舗」「場所」「環境」「育児」のカテゴリーが表 5 も多い。新たな「自然」「管理」「宣伝」のカテゴリーが生成されている。

K 町は豊かな自然に恵まれた地域である。したがって、「あるものを大切にしていって行くことが大切」「遊ぶ、触れ合う施設や場所がないことが、引越す要因の一つ」というアドバイザーの助言に影響を受けたことが考えられる。学習者は幼い頃から K 町で育ってきたので、自然豊かな環境にいることは当たり前のことであって、改めて自然の豊かさに気付かされ、生かすことを意識し始めたことが推察される。したがって、自然の豊かさを広めるために、自然を利用した大きな公園を整備し、管理し、町外に宣伝するというような考えに至った。また、新たに生成されたカテゴリーの「商品の取り扱い」は、アドバイザーの「あるものを大切にしていって行くことが大切」という助言を受け、新たな店舗を増やすことは難しいかも知れないので、今ある店舗の売り場に育

児用品を取り扱ってもらうようにするためにはどうすればよいかという考えに変化してきたことが窺える。

表4と表5を比較した結果、班でのやり取りを経た後の個人の考えは、例えば「店舗」では、最初「店を増やす」というだけに留まっていた考えが、班員との意見交流によって、「子育てが大変だからお店が近いと親も安心する」という根拠をふまえた考えがみられるようになった。その後、アドバイザーの助言では学習者があるのが当たり前と思って、気付かなかった豊かな自然について、意識が向けられることとなり、あるものを大切に、使っていくためにはどうするとよいかという意識へと変化してきたことが推察される。

3 KH Coder を用いた記述の計量テキスト分析

(1) 目的

学習過程の①、③および⑤時点の記述における名詞、動詞、形容詞、形容動詞、副詞、感動詞の言及の特徴を見出し、学習者の思考の特徴を見出すことを目的とした。

(2) 統計的分析

分析対象の語句の言及頻度の比較および共起ネットワークの構築には KH Coder (Ver. 3. Beta. 01a) を用いた (樋口, 2014)⁶⁾。学習過程の①、③および⑤時点の記述における名詞、動詞、形容詞、形容動詞、副詞、感動詞の他に、専門用語自動抽出用モジュール TermExtract⁷⁾を用いて「保育所」「住宅展示場」などの複合語を強制的に抽出し、抽出する語の区切りの調整を行った。これらの複合語は抽出語でタグとして識別される。学習過程の①で抽出された語の数 (名詞、動詞、形容詞、形容動詞、副詞、感動詞およびタグ) は、合計として 235 語 (分析対象: 82 語) であった。③で抽出された語の数 (名詞、動詞、形容詞、形容動詞、副詞、感動詞およびタグ) は、合計として 273 語 (分析対象: 94 語) であった。⑤で抽出された語の数 (名詞、動詞、形容詞、形容動詞、副詞、感動詞およびタグ) は、合計として 349 語 (分析対象: 81 語) であった。語句のコーディングでは、自由記述において類似の意味を持つ語の統一化を行った。具体的には、「子ども、子どもたち、こども→子ども」と統一化を行った。最小出現数 1 以上の語では、①時点では「増やす」を筆頭に、「公園」「作る」が特に高い頻度を示した。③時点では「作る」「子ども」「増やす」が特に高い頻度を示した。⑤時点では「K」⁸⁾を筆頭に「公園」「自然」が特に高い頻度を示した。

(3) 共起ネットワークの構築

記述において学習過程の① (図 1)、③ (図 2) および⑤ (図 3) の最小出現数 1 以上の抽出された語の共起関係を探った。分析にあたって、描画する図の円の大きさは単語の出現数を、リンクの太さは共起関係の強さを示している。円同士の距離は意味を持たない。

(4) 思考の変化

(図1)では、大きな円から広がったネットワークが2つある。少し円は小さくはなるけれども、太く濃いリンクで結ばれたネットワークが7つある。(図2)では、15のネットワークがある。ネットワークの数が増えていることから、思考が広がっていることが窺える。(図3)では、(図2)よりもネットワークの数は減ったが、11のネットワークがある。新たな語も見えてきていることから、見方や考え方に変化が生じてきていることが考えられる。

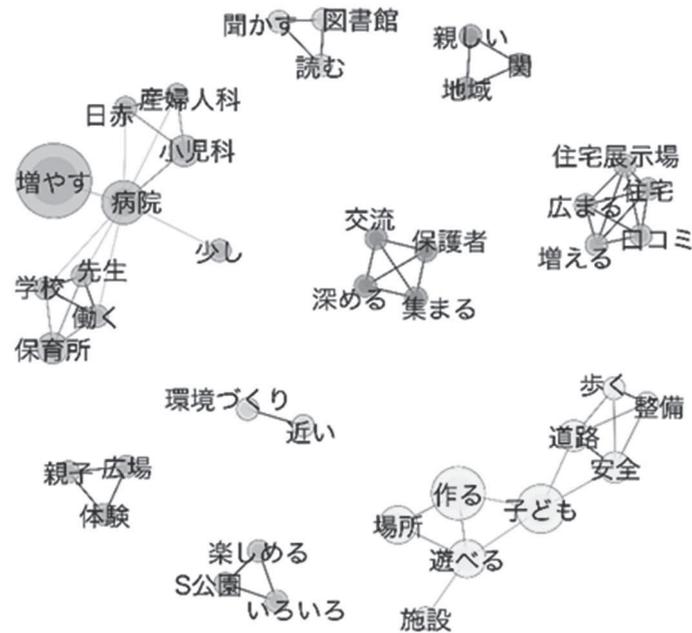


図1 学習過程①の共起ネットワーク

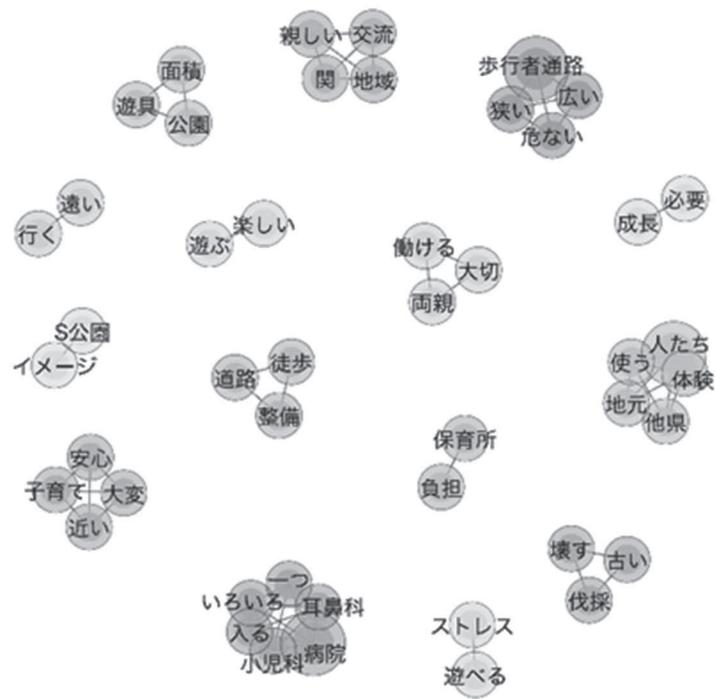


図2 学習過程③の共起ネットワーク

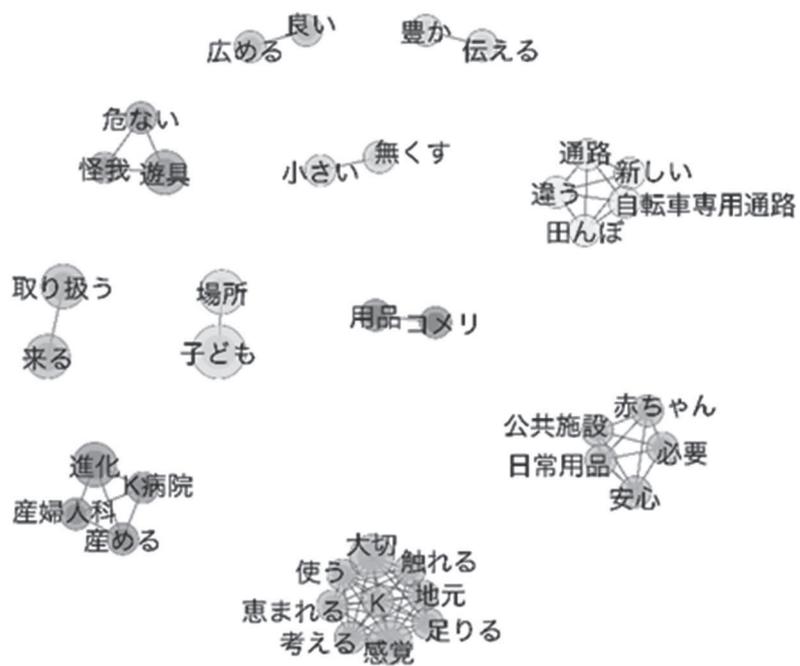


図3 学習過程⑤の共起ネットワーク

(5) 分析

(図1) について

最も大きな円を描き、広がりのあるネットワークにある「増やす」は「病院」とリンクが繋がって、「病院」は8本のリンクがある。2本は少し大きな円の「小児科」「産婦人科」という子どもの出生と育児に関わる診療科名と繋がっている。K町には、「病院」が少ないので、特に、子育てしやすい町ということを考えたときに、出生と育児に関わる「小児科」「産婦人科」を思い、記述したことが窺える。また「学校」「保育所」「病院」は、出生、育児に関わる公共施設であって、親が「働く」ともリンクが繋がっていることから職場としても考えていることが見受けられる。一方、「病院」より少し大きな円である「作る」は「子ども」「場所」「遊べる」とリンクが繋がっている。また、「子ども」と繋がっている「道路」「安全」は太いリンクで繋がっていることから、「子ども」の遊びの「場所」、「道路」の「安全」に意識が向いていることが窺える。子どもの遊び場所を整えることや、子どもが安全に暮らせる道路の整備を進めていきたいと考えていることが推察される。

KJ法カテゴリー分類においても、出生や育児環境など、赤ちゃんを産んで育てやすい環境を整えることを考えていることが見られた。KH Coderを用いた分析においても、「病院」を増やすことを最も高く意識していることが窺われ、出生や育児に直接関連するものに留まっていることが明らかとなった。

(図2) について

円の大きさがほぼ似てきているが、新たな語が見受けられる。新たな語として、「地元」「他県」「人たち」「使う」「体験」がリンクで繋がっている。「地元」の「人たち」が「他県」の「人たち」に、Kの特産物を「使う」ものづくり「体験」をしてもらいたいと考えたのであろう。また、(図1)に見えた「病院」に関する、「小児科」「耳鼻科」「入る」「いろいろ」「一つ」「病院」がリンクで繋がっていることから、K町にない「小児科」「耳鼻科」の診察科を現在の病院に併設したいと考えたことが窺える。

KJ法カテゴリー分類において、「交流」「活動」というカテゴリーで表れていたものが、KH Coderを用いた分析では、「地元」「他県」「人たち」「使う」「体験」というリンクの繋がりで見られ、町の特色を知ってもらおうとする取組を発想していることが推察され、思考の広がりが明らかとなった。

(図3) について

ネットワークの数は減ったが、新たな語も見えてきている。新たな語として、「大切」「使う」「触れる」「恵まれる」「K」「地元」「感覚」「考える」「足りる」がリンクで繋がっている。学習過程③までは足りないものを増やすことを考えてきていた学習者が、アドバイザーからの「あるものを大切にして使っていくことが大切」という助言によって、あるものに目を向け、改善の仕方考えるように意識が変化したことが窺える。学習者だけではなく、アドバイザーという

違った立場の他者の見方や考え方を生かそうとしたことが明らかとなった。学習者だけでは、現実から離れたような考えでやり取りしてしまうところであるが、アドバイザーの助言は町の現状を捉えたものであることに気づき、意識を変化させていることが窺われる。次の「通路」「新しい」「違う」「自転車専用通路」「田んぼ」がリンクで繋がっているのは、田んぼを利用して自然溢れる環境に自転車専用通路を敷き、K町の新たな魅力の発見に繋げ、町外の人たちにもアピールしたい考えであろう。アドバイザーの「あるものを大切にする」という助言を受け入れ、K町の豊かな自然を利用した大きな公園を整備し、管理しやすくすることや、現在ある店舗に育児用品を取り扱ってもらうように要望する考えが生まれ、今あるものをどのようにするとよいかというような改善に向けた意識へと変化してきていることが明らかとなった。

KJ法カテゴリー分類においても、「自然」「商品の取り扱い」というカテゴリーが新たに見られ、KH Coderを用いた分析においても、豊かな自然を利用した自転車専用道路や、現在ある店舗に売り場を増やして商品を取り扱ってもらうということを考え始めたことが示された。町の現実をどのようにすると子育てしやすい町にすることができるのか、足りないものを増やすことを考えてきた学習者が、今あるものをより良く改善していく意識へと変化していることが見取れ、KH Coderを用いた分析においても相違ないことが確かめられた。

IV 総合考察

本研究は、中学校総合的な学習の時間において、多様な他者とのやり取りを通じ、学習者の町に対する意識がいかに変化するかを検討することが目的であった。

分析の結果、学習過程①の個人の考えは、遊び場の公園や医療施設である病院を増やすことが中心であった。そして、班員との意見交流後の学習過程③になると、公園や病院を増やしたい考えを残しながら、育児を支える親の住環境、職場環境を整えたい思考も見られるように変化したことが示された。育児環境だけではなく、親が快適に過ごす住環境、職場環境を整えることが育児環境にも大きな影響を与えるという思考へと広がっていることが明らかとなった。さらに、アドバイザーからの助言後の学習過程⑤では、「あるものを大切にする」といったアドバイザーの助言を生かした、K町の豊かな自然を利用して自然溢れる田んぼに自転車専用通路を敷くことや、今ある病院に診療科を併設すること、店舗を活用しながら、売り場で育児用品を取り扱うことが考えとして見えてきた。学習過程③までは、足りないものを増やすことの方に考えが向いていたが、今あるものをより良く改善していく意識へと変化してきたことが窺われ、学習者が町の現実を理解し、自分事に引き寄せて思考していることが明らかとなった。

学習者が個人から班員との意見交流、アドバイザーの助言という学習過程を経ることで、他者とのやり取りを通じた対話的な学びが学習者の町に対する意識を変化させていくことを示した。学習者が他者からの知識や情報、見方や考

え方を活用して、新たな知を創り出していくことは期待できよう。

V 今後の展望

今後、町づくりに対する学習者の自分事に引き寄せた思考を深め、町づくり学習を進め、構想を具体化していく学習過程を経て、学習者が新たな課題に向き合っていくように展開していきたい。

本実践後の学習者の変化を追い、その後の町づくりの追跡調査を試み、本実践の検討を深めたいと考えている。これらの課題については、稿を改めて考察したい。また、本実践例をふまえ、異なる事例の検討を進めることは、総合的な学習の時間の対話的な学びを具体化し、整理する上でも必要と考える。

参考・引用文献

- 文部科学省(2018)『中学校学習指導要領解説総合的な学習の時間編』東山書房，p. 71, p. 107。
- 合田哲雄 (2016)「今、なぜ『アクティブ・ラーニング』か 5 資質・能力を育成するための主体的・対話的で深い学び」, 教育課程研究会編『「アクティブ・ラーニング」を考える』東洋館出版社, pp. 26-37。
- 田村学 (2018)『深い学び』東洋館出版社, pp. 21-23。
- 下山田隆・清野聡子 (2020)「定平地の豪雨災害から防災意識の伸長と SDGs への展開を図る中学校 ESD プログラムの開発」『土木学会論文集 G (環境)』, Vol. 76, No. 6, pp. 365-373。
- 竹村景生・松川利広ほか (2017)「ESD 佐保川流域プロジェクト (3) —佐保川を地域の文化・環境でつなぐ流域思考的な学びの総合“寧楽遊学”の構想—」『次世代教員養成センター研究紀要』第 3 号, pp. 139-144。

註

- 1) 総合的な学習の時間は、文部科学省 (2015)「中央教育審議会初等中等教育分科会教育課程部会生活・総合的な学習の時間ワーキンググループ資料 9-2」の「一部の学校 (特に中学校・高等学校) において、ねらいや育てたい力が不明確で、児童生徒自身が、何のために活動を行い、何を学んだか自覚できていない。」といった全国の学校現場の実践を分析した記載もある。
- 2) 本研究の目的を文書で学習者及びその保護者へ宛て、説明し、記述の研究使用への許可を得た。
- 3) 川喜田二郎 (2017)『発想法 改版 創造性開発のために』中央公論新社, p. 204。
- 4) 川喜田二郎 (1967)『発想法 創造性開発のために』中央公論社, pp. 3-220。
- 5) 川喜田二郎 (1970)『続・発想法』中央公論新社, pp. 3-316。
- 6) 樋口耕一 (2014)『社会調査のための計量テキスト分析—内容分析の継承と発展を目指して—』ナカニシヤ出版, pp. 8-233。

- 7) 専門用語（キーワード）自動抽出用 Perl モジュール “TermExtract” ,
<http://gensen.dl.itc.u-29tokyo.ac.jp/termextract.html>
(accessed 2020.5.6.) を使用した。
- 8) ここでは町の名前を記号化し, K と示している。

謝辞

本研究の執筆にあたっては, 調査校の学習者と保護者の皆様, 先生方から多くのご協力をいただいた。記して深く感謝申し上げる。

Examining a Practical Case of Learning for Community Development
— Focusing on the Changes in Awareness of Junior High School Students During
Integrated Studies —

KAMADA Akemi*1, KAJII Kazuaki*2

This study aims to clarify the effects of junior high school students planning community development through collaboration and interaction with others, and the changes in learners that arise from the results of such practice. It also examines how interactions with others, which are emphasized in dialogic learning, can be applied to junior high school practice and what form this should take. The goal of this practice is to foster a change in students' awareness of their town by having them interpret the future and nature of the town from various perspectives in relation to their interactions with others, and consider sustainable ways of living in the town and forming relationships as their own concern. As a result of the practice, students experienced changes in their perspectives and awareness regarding the town and were able to think about the regional issues involved in town development as their own concern.

Keywords: the period for integrated studies, junior high school student, community development, interactive learning

*1 Anan City Anan First Junior High School

*2 Faculty of Education, Okayama University
